

クルレンツィスの ヴェルディ「レクイエム」

ルツェルン音楽祭のイースター音楽祭

今年が目玉公演は、テオドル・クルレンツィス指揮ムジカエテルナとベルミ歌劇場合唱団によるヴェルディ「レクイエム」だ(4月10日)。会場では多くのジャーナリストやチューリヒ歌劇場関係者、そしてチェ

ンテリリア・バルトリも見かけたほどの関心の高さだった。「音楽に集中するため」仕立てたという制服に、合唱もオーケストラも男も女も身を包んでいたためか、実際に「アニェス・デイ」では、立奏の弦楽器奏者や合唱団が修道士たちに見え、聴こえた。

完全な静寂を作り上げた後、幻聴のように音が聴こえ始める。合唱は完璧なユニゾンで、究極まで弱声で歌えるため、ふだん聴こえない楽器の音も訴えてかけて来る。

ソプラノは、バーデン・バーデン祝祭劇場のブッチーニ(ポエム)でも、クルレンツィスの棒に完璧についていたザリーナ・アエヴァ。多少声が疲れているようだったが、ハイ・レヴェルな歌唱を聴かせた。メゾソプラノは病欠で、ジュネーヴ出身のイヴ・モウド・ヒュポーに代わったが、注文の多いクルレンツィスの音楽に、上手にはまっていたのには驚いた。テノールはピンカートンなども歌うディミトリ・ポポフだが、イタリヤ的に明るく輝く響きはなもの、柔らかく英雄的に歌い上げた。ドイツで活躍中のバス、タレク・ナスミは健闘したが、いちばん弱かった。

「リベラ・メ」では、ソプラノが合唱団の真ん中に移動し、全員が一体となって演奏し終わった後、長すぎるほどの時間、だれ一人身動きせず、徐々に緊張感を解いて、

すべてが終わった。こうして呈示された新しいヴェルディ「レクイエム」は、賛否両論が聞かれたが、聴き慣れた曲について真剣に考え、議論するチャンスを与えただけでも、貢献度が高いと言えよう。

本人は終演後、いつもよりずっと満足した様子で、「27度の訪日はこの曲に代えようかと思うけど、日本人は好きかなあ」と相談されるほどであった。

翌日はミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団が登場した。ドゥオーモ広場でのコンサートでも披露したというデニス・マツィエフとのチャイコフスキー「ピアノ協奏曲第1番」はピアノの独壇場だったが、ムソルグスキー(ラヴェル編)「展覧会の絵」では、さまざまな色合いを聴かせ健闘した。

来シーズンの記者会見二つ

4月5日、チューリヒ歌劇場の記者会見が開かれた。音楽監督のファビオ・ルイジは有終の美を意識し始め、アンドレアス・ホモキはまだまだやり残したことがあるように、二人の間に初めて体温の差が感じられた。ホモキにとっては、バルトリ主演のグルック《オーリードのイフィジエニー》の演出がハイライトのようで、ルイジにとってはグルック《シチリア島の夕べの祈り》に思い入れがありそうだ。その他、ファン・デイエゴ・フロレスのロドルフォ(ブッチーニ「ポエム」)初役、ビョートル・ベチャワはワグナー《ローエングリン》の演出付きデビュー(以前、代役として演出なしで歌ったことはある)が楽しみだ。来シーズンは、チェコの若手第一人者であるヤクブ・フルシヤが指揮する、ヤナーチエク《マクロプロス事件》で9月22日

に幕を開ける。

4月11日には、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団の記者会見に足を運んだ。来シーズンから首席指揮者に就任するパーヴォ・ヤルヴィを迎え、オーケストラ側は皆がうれしそうだったが、メディア側からは、前任者の短い任期を引き合いに出し、「長く続くか」という懸念の声が多く聞こえた。ヤルヴィの祖国エストニアをはじめ、北欧に焦点を当てたライン・アップで、それをトーンハレで実現させる意義がいま一つ見えなかった。

翌日、そのヤルヴィが指揮した定期演奏会最終日を聴いたが、ヤルヴィの得意とするベートーヴェンをしっかりと伝授され、細部まで磨き上げられた音と、楽団員のやる気が輝いていた。このヤルヴィを首席指揮者に冠するためならば、レパートリーはどの国のものでも、トーンハレ管弦楽団にとっては満足なのだと理解できた。

チューリヒ歌劇場の 《マノン》新制作

4月は新演出が2本発表される大忙しのチューリヒ歌劇場だが、今回はマスネ《マノン》プレミエについてレポートしたい。一言で言えば「デ・グリユー」というタイトルに変えたほどの出来映えだった。マノンと言えば、カルメン(ビゼー「カルメン」)に並ぶファム・ファタル(運命の女、魔性の女)で、それに振り回される可哀想なテノール、というイメージがあるが、フロリス・ヴィッサーの新演出は「テノール界のスーパーマン」ビョートル・ベチャワが

演じるからか、苦悩も乗り越えてマノンを愛し抜く強いデ・グリユーが表現され、オーソドックスな演出なのにもかかわらず、現代でも共感できる物語に仕上がっている。声楽的にも「歌のことで聴衆をハラハラさせてはいけない」とインタヴューで語ったベチャワは、高音もファルセットもすべてが安心して聴けて頼もしい。現在、注目を集め始めている新進ソプラノ、エルザ・ドライシックのタイトルロールは、華はないが、だからこそ、どこにでもいる女の子のようで共感を持てる若い客層も多いのではないかと。声楽的にも、数カ所、音程が気なる部分以外は立派に初役をこなした。マルコ・アルミリアートの指揮は、細やかさはないが、上質なエンタテイメントとしての音楽を聴かせた。



新進ドライシックの初役となったチューリヒ歌劇場《マノン》から ©T+T/Toni Suter